中古の歌人

日本歌人講座

文学博士 久松潛一
文学博士 實方 清 編

日本歌人講座 第二巻

中古の歌人

弘文堂

日本歌人講座　中古の歌人

中古の歌人

昭和四三年一一月三〇日　初版発行

定価一五〇〇円

編者　久松潜一
　　実方清

発行人　鯉渕年祐

株式会社　弘文堂

編集　東京都千代田区神田駿河台四―四
電話(二五一)七一八六～九
郵便番号　一〇一

営業　東京都文京区関口一丁目一四～八
電話(二八〇)〇四二〇～一
郵便番号　一一二

振替　東京五三九〇九番

印刷　あづま印刷堂(株)　　製本　(有)井上製本所

序

日本の抒情文芸の中心は和歌であり、和歌の中心は短歌である。抒情文芸の本質は抒情性と言う文芸性の中に認識される。この短歌は記紀の和歌から現代短歌に至るまで二千年に及ぶ美的伝統の中に生成発展してきた。この発展の相を文芸史的に見ると四つの大きい美的世界において認められる。それは万葉の世界と古今の世界と新古今の世界と近代短歌の世界とである。これを時代的に見ると上古と中古と中世と近代とである。近世は抒情文芸史の上では一つの谷間であった。和歌はこの四つの世界の中でその本質的世界を美しく表現して来た。この和歌史的展開をその美的内容の上からみると、純一と壮大な世界から典雅と連想の世界へ、そして幽玄と優艶なる世界へと展開し、近世と言う谷間を通って近代に至り浪漫と写生の上に近代短歌の絢爛たる美的世界を見ることができる。万葉の世界が成立するためには記紀の和歌と言う源流の世界があり万葉はここから発展成立し、感動と観照との中で壮大純一なる抒情の世界を創造したのである。柿本人麿と山部赤人とはその二つの世界を代表する歌人であった。この万葉の世界によって上古の和歌が形成されたのである。古今の世界は俊成や定家が庶幾した世界でもあって、典雅と連想の中に中古の和歌の世界を形成し、紀貫之・曾禰好忠・和泉式部・源俊頼等の代表歌人を出している。次いで新古今を中心とする中世和歌は上限に千載集があり、下限に玉葉集や草根集によって和歌史上最も光輝を放った中世の和歌の世界を形成し、俊成・西行・定家・爲兼・正徹などの代表的歌人を輩出している。ある意味ではこの中世の和歌によって和歌の本質的世界が形成されたとも言える。近世の和歌に至ると、古典歌集を庶幾する意識の中に、万葉主義の和歌と古今主義の和歌と新古今主義の和歌とが真淵と景樹と

宣長とを代表として形成されたのである。これに加えて現実主義の和歌が万葉主義との関係の中で形成され良寛や言道によって代表された。この近世の和歌は上古の和歌や中世の和歌のように本質的特色を持つものではなく古典歌集の中にその生命を見出そうとしたものである。それが近代になると短歌の世界は見事に開花し、浪漫派の短歌が先ず現われ、次いで現実派短歌と写生派短歌は多くの代表的歌人を輩出し、近代短歌はその極致を示現した。晶子によって浪漫派短歌が極致に達した後に現実派と写生派の中に左千夫・節・赤彦・啄木などが現われ近代短歌は充実と絢爛を競うたのである。そして近代短歌より現代短歌へと多くの歌人を輩出しながら推移して行った。

この和歌の発展の中で和歌史を形造った代表的歌人六十二人を選んでこれを八巻に編成しここに「日本歌人講座」を編集した。本講座は歌人の単なる評論ではない。専門の学者によって精細に研究された歌人論であり、歌人の抒情性の究明であり、その美的世界の認識である。従って現在の学界における歌人研究の最高水準を示すものである。本講座は世上にある雑多な事項や多くの歌人について雑纂的に編集されたのでなく、和歌史の体系を考え上古から近代現代に至る迄の和歌の本質的世界を明らかにし得るように代表的歌人を体系的に整序し、多年に亘って研究を深めた専門の学者によって精細をつくして研究されたものである。幸に和歌研究の専門学者の全面的協力を得てこの「日本歌人講座」全八巻を刊行し得ることは学界のため誠に喜ばしいことである。本講座に対して広く文芸を愛し和歌に関心を持たれる多くの人々の積極的な協力を願う次第である。

昭和四十三年九月一日

責任編集者　久松潜一
　　實方清

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

中古の和歌
在原業平……青木生子……三七
紀貫之……松田武夫……九三
凡河内躬恒……峯岸義秋……一四四
伊勢……関根慶子……二〇三
曾禰好忠……窪田敏夫……二六五
和泉式部……清水文雄……三一三
赤染衛門……前田妙子……三七三
源俊頼……峯村文人……四三四

中古の和歌

一

日本の抒情文芸史において上古から中古への展開は、純一・感動・観照・素樸・清澄・静寂の世界から情趣・感傷・知巧・雅情・哀婉・格調への推移であった。上古の和歌は万葉集によって代表されるものであり、その世界は感動と観照とによって表現されている。その感動としての心は中古の和歌に至ると、着想としての心へと展開し、観照の世界も中古の和歌においては大きく展開して行ったのである。上古の和歌には生命と直感とが溢れていたが、それが中古の和歌へ展開すると形式と連想の中にその本質が認められる。中古和歌の世界というものは極言すれば三代集の世界であるとも言えるのである。三代の典雅ということは美しい詞によって流麗な表現が行われた世界であって、詞の表現の中に連想美が確立されたのである。上古の和歌が心の表現を生命としたのに対して中古の和歌は詞の表現の中に抒情美を形成したと言うことが出来る。上古の和歌は既に述べたように万葉集によって代表される心と生命の表現としての芸術の世界であったが、中古の和歌は古今集によって代表される詞と連想の調和による表現であり、詞の花がつねに主位にあったのである。上古の和歌の調というものは五七調であり、それは感動と生命との表現の中にみられる壮重美の世界であったが、それが中古の和歌とくに三代集になると七五調になり、初句切と三句切が行われて形式美と連想美とが流麗な調の中につねに主位をしめたのである。和歌において形式美が重視されると、感動美としての内容はみられなくなり、表現の形式としての詞の世界のみが問題となった。この和歌における詞の表現美を重んずる傾向の中に却って心を重んずる歌論が生れたということはある意味では必然の相であったとも言えよう。このように考えると万葉集の中にも古今的世界への推移

が実質的に見られたものであり、その第四期における大伴家持の歌にそれが明らかに見られる。これは感動様式の世界よりは観照様式の展開の中に上古的なものから中古的なものへの展開相がみられる。これは本講座の第一巻において、山部赤人の自然観照を説述した場合に、その自然観照が大伴家持に至って大きく内容的展開があったことを指摘し、観照様式の展開について述べたことは上古の和歌から中古の和歌への展開の相を明らかにする一つの方法であったのである。和歌における感動様式の展開と観照様式の展開とを考えることは和歌史の主流を探ることになる。これは上古において成立した和歌の世界がいともあざやかな相をなして中古の和歌へ展開しているのである。中古の和歌の世界は八代集の展開の中にその本質的内容をみることが出来る。しかし八代集と言っても千載集と新古今集とは中世和歌の中に入れるので、古今集から詞花集までの六代集の展開ということになる。従来上古の和歌とか中古の和歌と言われている和歌史の問題は文芸学の立場より考えると色々な問題が存在している。和歌史における中古や中世の概念が一般政治史の概念と同一であるように従来は考えられているが、そのような安易な考え方はやめて、和歌の本質的世界を深く考察して和歌史における時代区分を決定すべきである。政治史や社会史の上から和歌史の中古や中世を規定することは、日本文芸史の上から明らかに誤りであり、抒情文芸史の本質に立つべきである。このような考え方から和歌史における中古の概念を明確に規定し、中古の和歌の世界を和歌という文芸性に即して明らかにすることは、和歌史研究の最も重要な作業である。

和歌は日本の抒情文芸の中心を形成しているものである。和歌の本質は外形的な詞ではなく抒情性としての文芸性にある。抒情性は叙事性や自照性とは異なり、人間感情の純粋な表現にある。感情の純粋表現は感動という相の中に見られる。この感動は和歌の心の中心的なものであり、和歌の心というものは色々な内容において考えられる。素材内容としての心と着想としての心と表現内容としての心との三つの内容において把握される。素材内

容としての心は感情であり、着想としての心は想であり、表現内容としての心は余情であると言える。上古の和歌の世界を感動と観照の世界の中に認めてその本質を考えた方法で、中古の和歌の本質を認識することは困難である。上古の和歌における感動は中古の和歌においては見られない。その感動としての心は、想や趣向の中にみられる想として存在し、既に感動の生命は失われたようにみられる。連想や趣向の世界にはそれなりの価値と意義とが認められるであろうが、万葉における感動の生命は連想と感性の中に展開したようである。和歌における抒情性という本質的な流れは、この中古においては想の中に変質したが、しかし在原業平や和泉式部の中に受けつがれ、金葉集では俊頼によって優なる心が重んじられるようになり、俊成や西行において和歌の真実の心としての抒情性が余情という内容において表現されたのである。その意味では人麿の感動は和歌の本質を形成する抒情性として現代短歌にまで及んでいる。しかしこの感動にしてもまた観照にしても、上古から中古に推移すると展開がありそこに変化がみられる。これは個々の歌人の中にもみられるが、全体としても上古の思潮から中古の思潮への展開の中にもみられる。上古はその思潮の基盤が素樸主義であり、それは太古のそれとは少し異なり、大陸文化の影響を受けて文化的に洗煉されており、文化的素樸主義の内容を持っていた。それが中古に入るとすべてが感性的となり主情主義の基盤へと変り、もののあわれの中にすべての存在価値を見ようとする傾向になり、感性的主情主義というものが中古的世界の内質を規定するようになったのである。和歌の世界もこの思潮の変化展開の中にそれがみられたのである。ここに万葉集の世界と古今集の世界との相違性がみられる。このように考えると中古の和歌というものは中古の思潮の中に変化し展開しているが、それ自体の中に和歌史の主体を形成しているのであって、ここに上古和歌史や中古和歌史さらには中世和歌史というものの主体的世界が形成されているのである。本講座においても私の考え方に従って中古の和歌と中世の和歌とを区別している。中古和歌史はそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の上限は問題がないとしてもその下限については問題が存するのである。それは時代的には中古の末に生きた藤原俊成と西行法師の二人は中古の和歌に入れずに中世の和歌の中に入れて、本講座においても中世の歌人において扱うことにした。それは俊成や西行の和歌の世界は、本質的に中古的ではなく中世的であるという観点から規定づけたものである。従って中古の和歌は六歌仙の和歌の世界と八代集のうち詞花集までの世界を含む和歌の世界である。だから注目すべき歌集は古今集と金葉集であり、その歌人は在原業平・小野小町・紀貫之・凡河内躬恒・曾禰好忠・和泉式部・源俊頼等の歌人によって代表されるであろう。この中で金葉集や詞花集には中古的なものとともに中世的なものもかなり現われており、観照の深さや詠嘆的世界の多いことと「あはれ」の世界への傾斜が相当みられるのであって、純粋に中古の和歌の世界というものは三代集と後拾遺集と四代集の世界であるということがより適当であろう。一方観照の世界の展開についても既に山部赤人の説述の中で観照様式の展開を付説したが、中古和歌の観照は万葉集の大伴家持の歌の中にみられるのである。その自然観照の中で上古的なものから中古的なものへの展開相がみられる。歌の世界で感傷的又は哀感的という世界は上古の和歌ではあまり見られなかったのであるが、中古の和歌に入ると、この感傷と哀感の世界が「かなし」「わびし」「あはれ」という詞によって表現されているのである。万葉集において確立した自然観照は山部赤人によってなしとげられたのであるが、それが大伴家持に至ると自然を感傷的に感じ、哀感の中に受取っている処がみられ、観照様式は中古においてはその生命を失ったかの如くであった。それが中世に入ると新古今集にみられる観照の深さの中にその生命をとり戻して行き、玉葉集において京極為兼の歌の中で赤人的観照の中世化が行われた如くである。上古和歌の観照と中古和歌の観照の相違は、前者が純粋性と対象性を持っていたのに対し、後者は感傷性と連想性の中にみられるのであって、観照の生命は失われて行ったということができるであろう。上古和歌の世界においては

主観の客観化と対象化がみられ、歌人の主観は対象の生命と連結されていたが、中古の和歌では客観化や対象化が連想性の中に姿を没し、それは感傷性の中に主観化した相がみられるようである。上古の和歌においてはつねに素樸と統一・感動と観照・清澄と静寂とがみられたのであるが、それが中古の和歌においては感傷と知巧・情趣と連想・哀婉と格調が中心となり、典雅流麗ということが和歌の本体として重んじられるようになった。要するにそれは心の表現から詞の表現へと展開されたものの如くである。詞の表現はどの場合にもあるが、中古のそれは詞の流麗な調べということが重んじられた表現であった。そこで表現されようとした心は感動としての心ではなく、一首の歌を流麗にあやなして表現する趣向の中にある想であったのであり、従って上古和歌から中古和歌への展開は心から想への展開であったと言える。その想は「みやび」の内容を持つものであり、雅情や情趣の世界の中にその本質が認められるのである。しかし中古の初めの頃には心や情の表現が多くみられ、在原業平や小野小町などには「心あまりて詞たらず」と言う表現の世界が認められる。中古の文芸が「もののあはれ」の形象化の世界であると言われるが、この「あはれ」は中古から中世を通してその和歌の世界では極めて重要な美的理念であり、その内容は色々な意味に把握されている。だからこの「あはれ」という言葉は感動的な面にも悲哀的な面にも用いられ、恰も日本の抒情文芸の世界の代表語のような意味を持って中古から中世へと展開して来たものである。ただ上古の和歌と中古の和歌と中世の和歌の三つの世界を本質的にみるとき、上古の和歌は「まこと」であり、中古の和歌は「みやび」であり、中世の和歌は「あはれ」であると規定するとき、大体において該当するようにも考えられる。このように見ると中古の和歌と言うものは「みやび」の世界の中にその本質が認められるのであり、三代集の典雅というのは雅情が流麗に表現形象化された世界であるともみられるのである。

二

中古の和歌の中心は古今集にあるが、古今集を中心とする三代集の前の和歌と後の和歌とが存する。前の和歌は六歌仙の和歌の世界であり、後の和歌とは後拾遺と金葉の世界である。中古の和歌は時代にすれば桓武天皇から近衛天皇に至る頃までを言うのであり、小野篁・在原業平から源俊頼・藤原顕輔に至る頃までを考えることが和歌史上の中古ということが出来るであろう。六歌仙から詞花集までの間の和歌を中古の和歌と言い、千載集は中世和歌に入れるのである。従って俊成や西行は中古の歌人ではなく中世の歌人として認めるのである。一説には俊成・西行・定家までを中古の歌人として扱う者があるが、新古今集までを中古の和歌に入れて考えることはあまりにも極端な意見であると言うべきであろう。中古の和歌において古今集が撰進されたのは延喜期であるが、それまでに弘仁期と貞観期とがあり、とくに貞観期は六歌仙の時代として和歌史上に意味を持っている。そしてこの貞観期を経て延喜期に入り、中古和歌の花は咲き乱れたのである。古今集という第一の勅撰集が撰進されたのである。次いで寛弘期と康和期とがあり、前者の時代では曾禰好忠と和泉式部・赤染衛門等が現われ、後者の時代には金葉集が撰進され、源俊頼が出て和歌の革新を行っている。中古の和歌における革新への動きは曾禰好忠によって既に行われているのであり、その上に立って源俊頼が停滞から発展へと和歌の道を開いたと言うことが出来るであろう。和歌史の展開の上からみると中古の和歌というものは中世の和歌にくらべて低い処を流れていたようであり、万葉の世界という大きい山に対しても美しい庭園のような感じもするのであり、そこには古今集の本質価値ということが大きく問われているのである。この講座の第二巻で当然扱うべき歌人も色々な事

情でそれが出来なかった者は小野小町であり、更に八代集の展開ということが一つの研究主題として残ることは文芸史的必然である。それと同時に中古の和歌では歌論というものが成立し、和歌の展開の上に大きい意味を持って来たのである。だから中古の和歌の本質的世界を解明するためには、歌人を一人ずつ究明するとともに八代集の展開の中にみられる和歌史の流れと歌論の成立と展開の中にみられる文芸理論の意義とを併せ考えることが重要なこととして要請されるであろう。従ってこの総説としての中古の和歌においては、六歌仙の歌の世界を考え次いで古今集の世界を述べ、ここから八代集の展開という抒情文芸史の展開について考察し、その後で中古の歌論の成立と展開を考えて中古の和歌の本質的理解をより明白にしたいと思う。

弘仁期の和歌は中古の和歌の初期であり、万葉集第四期から中古の六歌仙時代の和歌に至る過渡期のものである意味では中古和歌の実質を十分持っていないのである。この期は桓武天皇から仁明天皇までの五代七十年間で、一般には漢文学が盛んであり、和歌は万葉集第四期の後をうけて僅かにその残映がみられた時代であった。この期はすぐれた歌人は現われなかったが、民間に在っては多くの人々によって和歌は詠まれていたのであり、とくに小野篁が漢詩人であるとともに和歌の上にややすぐれた歌人であったと言えるであろう。既にこの期においては万葉においてみられた長歌や旋頭歌は全く衰微し、短歌のみが余命をつないでいたという状況であった。この期の和歌として注目すべきものは古今の読人知らずの歌がその歌風や調べや用語の上からみて相当あるように思われるのである。「春がすみ立てるやいづこみ吉野の吉野の山に雪はふりつつ」「今もかも咲きにほふらん橘の小島のさきの山吹の花」「夕されば衣手さむしみ吉野の吉野の山にみ雪ふるらし」の如きはこの期の歌と推定されるものである。この外に後撰集にとられた歌としては「うつろはぬ心の深くありければこころある花春にあへるごと」(檀林皇后)がみられる。この期の著名な人の歌としては小野篁の「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人

にはつげよあまの釣舟」（古今集・羈旅）があり、これは小野篁が遣唐副使に任ぜられたが、大使の藤原常嗣と不和であったので病と称して行かなかったので嵯峨天皇の御怒りにふれ隠岐島に配流されたときの歌である。この外に「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれゆく舟をしぞ思ふ」も一説には小野篁の歌と言われているが、これは今昔物語に書かれていることが誤りであろうと思う。これは柿本人麿の歌とも言われているが、人麿の歌でもなくまた篁の歌でもないとするのが正しいであろう。この弘仁期に属すると思われる歌は既に述べたように読人知らずの歌が多いのである。古今集にある読人知らずの歌四三〇首に及ぶものの時代別は確認できないが、表現が素直であり自然的であって抒情味のある歌はまことに注目に値するものである。この読人知らずの歌の中には前にあげた「春霞たてるやいづこみよしのの吉野の山に雪はふりつつ」の外に「さつきまつ花たちばなのかをかげば昔の人の袖のかぞする」のような歌は後世にこれを本歌として多くの歌が作られたほど後人に愛好されたものである。古今集の読人知らずの歌は相当多くこの弘仁期前後の歌であり、また巻二十の大歌所御歌・神遊歌・東歌等もこの弘仁期のものが多い。また後撰集の中の読人知らずの歌の中にもこの期の歌がかなり多いようである。これ等の歌はたけ高い万葉的なものが認められるが、しかし知巧的になっている点が認められるようである。この期の歌を数首次にあげてみよう。「白雲に羽うちかはしとぶ雁の数さへ見ゆる秋の夜の月」（古今・秋上）「降る雪にかつぞ消えらしあしびきの山のたぎつ瀬音まさるなり」（古今・冬）「梅の花それとも見えずひさかたの天ぎる雪のなべて降れれば」（古今・冬）これ等の歌は万葉的世界の名残りを止めており、自然観照の中にたけ高い姿を持っている歌である。全体の調べも万葉調のところが見られる。「夕ぐれは雲のはたてに物ぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて」（古今・恋一）「天の原ふみとどろかし鳴る神も思ふ中をばさくるものかは」（古今・恋四）「近江より朝立ち来ればうねの野に鶴ぞなくなる明けぬこの夜は」（古今・大御所御歌）これ等の歌は万葉風が若干みることが出来るが、しかし全体としては観念的と

なり、知巧的な点がみられる。それはかなり古今的な世界の中にその特質がみられるようである。かくして六歌仙の歌の世界へ展開し、そして古今集の世界が形成されて行ったのである。和歌の世界においてはこの弘仁期の和歌のような過渡的存在があって、二つの大きな和歌の世界のかけはしの役割をしているのである。上古和歌と中古和歌とのかけはしはこの弘仁期和歌であり、中古和歌と中世和歌のかけはしは詞花集であり、中世和歌と近世和歌とのかけはしは寛永期の和歌であり、近世和歌と近代和歌とのかけはしは明治初年から二十年頃までの和歌である。和歌史においてはこのような「かけはし」的存在の和歌の世界があったことは注目すべきことであろう。このような和歌史の間隙を忘れることなく考察することによって、和歌史の展開相が正しく理解されるのである。

中古の和歌は弘仁期を経て貞観期に入って和歌はよみがえって来たと言うことが出来るであろう。中古の初期は平安遷都という政治的な革新があり、支那文化の摂取の中に漢文学の流行という風潮に和歌は一時影をひそめたに見えたが、次第に日本文化への自覚が深まって和歌が次第に重んじられるようになり、ここに六歌仙の時代が到来したのである。万葉集から古今集に至る過渡期に六歌仙が出たのであり、この六歌仙によって中古の和歌はその内容が著しく変って来たと言うことが出来る。既に六歌仙の和歌は漢文学的内容を経過したことによってその素材と主題と表現とにおいて万葉集とは異なるものがあり、万葉集の感動的なものに対して知性的なひらめきが次第に増して来たのである。この六歌仙の和歌は知性的なものが中心となり、ここには漢詩的修辞法の影響がかなり明らかに見られる。しかし業平と小町とは知性的なものばかりではなく、情性的な世界がかなり深くみられ「をかし」よりは「あはれ」によって規定し得る世界を持っていたようである。中古における感性的主情主義は一面においては浪漫主義的であり、この浪漫精神を最もよく体現している歌人が在原業平と小野小町の二人で

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com